

# アルバムのなかの戦後開拓

土田 拓

## はじめに

1924（大正13）年静岡県志太郡青島町（現藤枝市）生まれのYさんが、嫁ぎ先のU家のある北海道へ渡ってきたのは、1949（昭和24）年のことだった。復員兵であった彼女の主人は、富士山麓の開拓講習所を経て北海道に入植していた。<sup>(1)</sup>そこへ嫁いだYさんの半生もまた、戦後開拓の営みとともにあり続けてきたことになる。

彼女の手許には、物心つく前からの写真が収められた、45冊のアルバムがある。若い時分の写真が整理されている1冊を除いて、残りは、北海道へ渡ってから撮られた写真により構成されている。この写真群から、戦後開拓地に定住した家々の暮らしの立て方の、ある断面を掬ってみることが小稿の課題である。

## I 「U家アルバム」の読み方

### (1) 「U家アルバム」

具体的にアルバム写真を見てゆく前に、まず、これからとりあげる「U家アルバム」の基本的な性格や、小稿における家族アルバムの読み方について確認しておきたい。

ここで「U家アルバム」と呼称するのは、Yさんの手元に置かれている45冊のアルバムのことである（写真1）。アルバムの大部分は、背表紙に通し番号を持っており、題目が付された巻もある。最初の1冊には、Yさんの子供の頃の写真が多く収められ、「昔々」という表題がつけられていた。そこからは、ある時期に過去を振り返る形で編集された経験をこのアルバムが持っていることを理解できる。この1冊目を除いた、残り44冊には彼女が北海道へ渡って以降の写真が貼付されている。見せていただいた範囲のなかでは、1冊につき80

～100枚ほどの写真が収められていた。アルバムに整理されていない写真もあわせると、U家に保存されている写真は総数にして4000枚はあるだろう。

その大半を占める移住後の写真を撮ったカメラは、現在までに3度買い換えられている。最初のカメラは、市街地で荒物屋を営んでいた生家から持ってきたものであった。嫁ぐにあたってYさんは、必要なものを自身でリストアップし、家族の協力のもとに準備していた。なかには開拓地においては入手の難しいものも多数含まれており、そうした品は、嫁ぎ先の近隣住人が借りにくることもあった。

「（入植地には）長靴も売ってないし、地下足袋も売ってないし。したからね、私が来た頃には、（市街地へ行くから）長靴貸してくれとかね、コウモリ（傘）貸してくれとかね」（括弧内は筆者注。以下同）

嫁入りにあたって持ち込んだ品々が、開拓地での暮らしを様々な形で補っていたのである。カメラもまた、そうして持ち込まれた道具のひとつであった。

アルバムの成りたちやカメラの導入経緯は、U家アルバムにYさんの個人史が色濃く反映されているさまを示している。とはいえ、アルバムは決して彼女個人のものではなかった。Yさんの娘さんが嫁ぐ際に、アルバムから写真を抜き出していったことから、そのことがわかる。45冊のアルバムはYさんを軸としつつも、U家の、家族のアルバムだったのである。

### (2) 画像資料としての家族アルバム

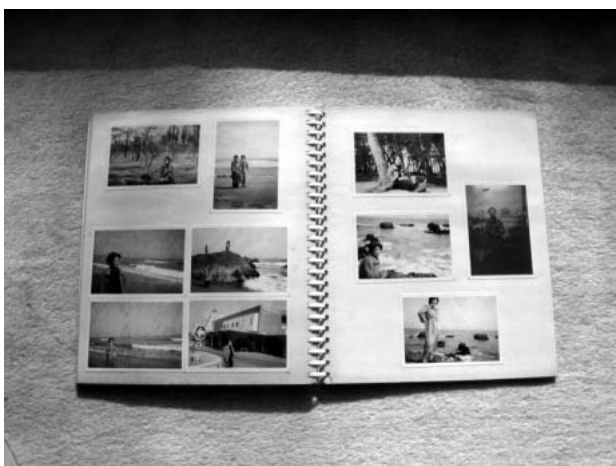
家族アルバムの分析はこれまで多様になされてきた。<sup>(2)</sup> 写り込んでいる事象についての情報を引き出すことで、アルバム写真に収まった当時の生活の物質的・経済的背景を捉えようとする試みも、そのひとつである。

例えば、松戸市立博物館における団地居住者の昭和中期の生活再現の企画展示では、家族アルバムが基本資料となっている。それは「ある実際の家族の生活を

## 写真1 「U家アルバム」



1-1 「U家アルバム」は、このような形で机の上下に並べられている。机上のアルバムの手前に積まれている缶には、ネガや未整理の写真が収められている。



1-3 見せていただいた範囲のなかでは、アルバム1冊につき、80～100枚ほどの写真が貼付されていた。

歴大なカット数の家族写真によって追い、その生活の軌跡を確かめ、そのなかの一場面を再現」（青木 2000：114）するものであった。また『板橋区史 資料編5民俗』（板橋区史編さん調査会 1997）でも、6軒の家族アルバムから、家族の生活史を記録している。

このように凶像資料としての写真に焦点をあてた場合、1枚1枚の写真を丹念に読み込んでいくことが基本的かつ重要な作業になる。その上で写真を群として見た時、「古い写真群を対象として様々な切り口から写っているものをカテゴライズし、そのキーワードの構造を把握」（香月 2007：32）しうる可能性が出てくる。香月洋一郎は、「澁澤写真」中の喜界島で写された一群に、ソテツを点景としてもつ写真が少なくないことを指摘し、「これはそのまま、この地の人々の暮らしにおいてのこの植物の意味を語っている」（香月 2007：23）



1-2 45冊のアルバムうち23冊ほどは、ココヨの同タイプのアルバムになっている。縦330mm、横275mm、厚さ22mmほどである。厚さは同じタイプのアルバムでもばらつきが見られる。

写真左：外箱、右：アルバム本体。

表1 背表紙記載文（小稿使用分）

外箱背表紙	アルバム本体背表紙
1	1949～1966 入植～A学校入学
2	1966～1972 K住宅へ引越～B予比校へ
外箱なし	3 1968 九州ばあさま来訪

\*1「A」「B」は娘の名前。Kは引越先の家の前住人の名字。\*2「1」「2」「3」は通し番号である。以下、小稿における写真番号末尾の(1)～(3)は、その写真が収められたアルバムの通し番号を示している。

と述べる。

「澁澤写真」は家族アルバムではないけれども、キーワードに基づいて写真を群として把握する方法は、家族アルバムへ援用することができるだろう。アルバム写真をカテゴライズする作業を通して、その家の生活構造の一面を理解できるはずである。それはまた、その家の属する地域の生活構造の典型を目にすることでもある。

小稿では、「生産活動」というテーマのもと、いくつかのキーワードからU家のアルバム写真をカテゴライズしてみる。それにより戦後開拓を経験したこの家が、いかに生計を維持し、暮らしをたててきたのかを把握して、みるのが課題である。

とはいえ、移住後から今日までの全てを対象とするのではなく、ここでは入植後の最初の約20年間に焦点

をあててみたい。その時期は、U家をはじめこの地域に関する聞き書きのなかでは、乳牛の多頭飼育化が進み、多くの家で生計維持の方法が転回した時代にあたる。そのため、まずは酪農に生業が集約するまでをひとつの時期区分とし、そこにおけるU家の生産活動の様相と生計維持の仕組みを理解する必要があると考えた。

アルバムのなかで具体的に対象となるのは1949～1972年頃までの写真368カットである。ちょうど、北海道移住後の写真を収めたアルバムのうち、最初の3冊分に相当する。3冊のアルバムの背表紙には年代が書かれており、以下、写真の撮影年代推定はそれに基づく(表1)。

## Ⅱ 戦後開拓農家の生産活動

### (1) 乳牛と馬—必要条件としての家畜飼養

#### 1頭の貸付牛から

U家の位置する紋別市内陸部では、現在、主たる生業として酪農を営む農家が一般的である。この辺りは、1886(明治19)年に北海道庁によって始められた殖民適地の調査(殖民地撰定事業)と、その撰定地の区画割後に入植を行わせる土地処分(殖民地区画事業・1889<明治22>年より施行)が進展する中で入植者の急激な増加をみた地域であった。<sup>(3)</sup>その当初から酪農が生計維持の柱であったわけではないのだが、今にいたるまで家畜が重要な役割を果たしてきたことは、聞き書きのなかからも、アルバム中にたびたび馬や牛が写り込んでいることから窺える。そこで、「家畜の飼養」を最初のキーワードとしてみる。

紋別市内陸部で乳牛の多頭飼育化が顕著になってくるのは昭和30年代以降のことであった。

それ以前、初め牛を1、2頭飼っていた頃は「たばこ代稼ぎ」だったと、1917(大正6)年生まれのある男性はいう。それが「小遣い稼ぎ」になり、「生活稼ぎ」に昇格していった。生活稼ぎとなったのは4、5頭飼うようになってからである。2頭、3頭、4頭でお金の重みが違う。最初の頃は、「あそこの家では3頭しぼっている」と聞いて感心していた時代だった。彼の生活感覚からみた、多頭飼育化が進む前、昭和20年代後半頃の乳牛飼養とは、このような営みであった。<sup>(4)</sup>

その後、乳牛の数を増やしていく中で、生業として

の重みだけでなく、飼養の仕方、飼料の構成、牛舎をはじめとした飼養環境、牛乳の集出荷の方法、なども変わってきた。はじめは1頭1頭鎖につないで牛を草地へ繋牧していたのが、放牧、あるいは年中舎飼するようになり、飼料として発酵飼料や配合飼料の需要が高まるとともに、それに関係する施設が家々の生産領域に加わっていった。搾乳は人間の手から、ミルカーとよばれる搾乳器へと移行している。こうした変化はどの家にも一様に訪れたわけではなかった。生計を維持していく上での個々の農家の選択や配慮の違いが、乳牛をめぐる営みの変化のなかには現れている。<sup>(5)</sup>

そうした家々の姿勢の違いを含みながらも、地域としては、乳牛の多頭飼育化が進んできた。U家アルバム中にも、その酪農の歩みを確認することができる。そして、放牧、牧草刈、牧草運搬、牛舎内の様子といった酪農に関わる要素は、他の生産活動と比べるとよく写真に写りこんでおり、乳牛は重要な点景のひとつとなっている。

初期のアルバムに収められた写真2-1-(1)はU家で最初に導入された乳牛、貸付牛である。<sup>(6)</sup>首に結ばれた鎖によって繋がれている点に、少数飼育の頃の牛の飼い方を読み取ることができる。牛の数が増えた写真2-3-(3)～2-5-(2)になると、鎖は首から消えている。写真2-2-(1)の牛追いも、牛の頭数が増えてくると、手間がかかることを理由に行われなくなった。

このようなアルバムのなかの乳牛をめぐる営みの変化は、聞き書きで確認できることを単に視覚的に補足するものではないだろう。林の中に鎖で繋がれた1頭の乳牛を写した写真2-1-(1)と、拓かれた牧草地上で草を食む数頭の牛を写した写真2-3-(3)を並べてみると、そこから、2枚の写真の間にある時間の経過と、そのなかでの酪農の変化が直截に現れてくる。聞き書きを通して秩序だって把握されるのとは別の形で、U家の生活に占めた酪農の位置を示してくれる一例である。

#### 馬の畜力

入植初期の頃、まだ酪農はU家の生業として突出した存在ではなかった。現金収入の面に限ってみても、月々の牛乳代の他に、澱粉の原料となる馬鈴薯や、大豆の出荷、馬の販売、鶏卵の販売、冬期の林業、といった生産活動を確認することができる。<sup>(7)</sup>Yさんは、20羽の鶏卵の売上げで、子供が学校に持っていくお金をまかなっていた、という。

## 写真2 家畜の飼養① 乳牛



2-1-(1) 「うちで最初にあたった貸付牛。これから始まったんだ」という。乳牛を繋ぐ場所はなるべく立木のない場所が選ばれていた。牛に結ばれた鎖が立木に絡まるのを避けるためである。この写真には立木が写っていることから、母屋の近くであるとYさんは推察している。



2-2-(1) 入植の始めの頃、近くの農場でYさんの主人が雇い人をしていた時分の牛追いの様子。



2-3-(3) この頃になると2-2-(1) のような人を伴っての牛追いではなく、放牧になっている。中央右よりの建物が母屋、左側の継ぎのある建物が畜舎である。畜舎の左半分板張りの部分が最初に建てられ、後に右半分ブロック部分が追加されている。母屋、畜舎とも、元は別の人の生活の場であった。U家が引き継いだのは1967（昭和42）年頃のことである。U家では左半分、板張りの側で馬を、右半分に牛を入れていた。2006年の低気圧により、板張りの部分は屋根が飛ばされてしまったため、解体されている。



2-4-(2) 2-3-(3) へ引越す前の畜舎周り。写真中の右端に写る建物と2-5-(2) に写る建物は同一のもので、家畜小屋である。左側に写っているのは井戸ではなくトレンチ。これにデントコーンを詰めて発酵させる。少ししか入らないが普及員が来てすすめるため、どこの家でも作った。これは手間替で作られた。デントコーンを詰めて満杯になると、足で踏む。普及員は、「もう借金はなんぼでもすれ、(酪農の)規模拡大規模拡大」と言っていた。



2-5-(2) 左側が牛舎、右側が鶏小屋で、鶏小屋は後から付け足されている。20羽ほどの鶏を飼っていた。その鶏卵の代金で、子どもが学校に持っていくお金をまかなっていた。当時、Yさんがお金の出し入れをするのは学校関係の子供の養育費くらいであった、という。写真を左側に進むと2-4-(2) の場所に出る。

写真2 家畜の飼養② 馬



2-6-(1) 乾草を牛舎に運ぶときは、馬車の上に四角く積む。その四角く積んだ上にYさんが乗り、ご主人が馬を追った。乾草の上に乗ったのは、それを運び入れる牛舎に横付けした際、2階へ直にあがるためである。それにちょうど良い高さになるようにカンソウを馬車上に積んでいた。この写真の場合、積み方がだらしなないことから、その時々で牛に与えるために刈った草とみられる。



2-7-(2) 餌が足りなくなると、牧草を少し刈って与えていた。写っている青草がそれである。「馬はいつ売ったんだっけな。いよいよ使わなくなって、馬は使わなくなったんで、それで馬の代わりにトラックを買ったんだわ」という。



2-9-(1) お正月の御飯支度がいいかげん嫌になって、遊びに行くところである。着物を着ているのは、お正月だから着物を着なくてはならないと思っていたからである。背後に写っているのは馬小屋で、麦稈で葺かれている。



2-8-(1) 海岸部へ浜砂をとりに来たところ。浜砂は粘土性の土地へ入っていた。



2-10-(1) 写っている馬はモベツである。勢いよく走る馬だった。背後の壁は、内側から土を塗って、木舞からその土がはみ出た状態である。これから、外側にも土を塗る。ただし、Yさんは、馬小屋の壁作りとして木舞の葺を結んだ覚えはないという。

日常生活に占めた酪農以外の営みの重要性は、時代をさかのぼればさかのぼるほど高かった。それらの生産活動の多くに関わっていた家畜が馬である。子とりを行い現金収入を得ることもあったが、基本的に馬に期待されていたのは畜力であった。新たに土地を拓く場所では、倒木や伐根作業を助け、定畑となるまで拓かれた場所では、農具を牽き、収穫物を運搬した。冬山造材では、木材の伐り出しと運送の原動力となった。そして、糞尿は堆肥として利用される。U家では、牛馬の糞尿を区別することなく堆肥場へ積んでおり、それを、1年に1回秋起こしをする前に、畑へ入れていた。<sup>(8)</sup>馬の存在なしに、U家の暮らしは成り立たなかったといえる。

それは、酪農に生業がある程度集約化した後も変わっていない。牧草の運搬【写真2-6(1)、2-7(2)】など、酪農のなかに馬を必要とする場面が残されていたからである。この運搬作業が、馬に働きを求める仕事としては最も遅くまで残っていた。「馬が最後まであったのは(働いていたのは)、運搬だけ」とYさんは語る。

前述のように生産活動を写した写真はそう多くはなく、アルバム中の馬は、U家の生活に占めた馬の役割の全てを見せてくれるわけではない。そうしたなかで「馬」をキーワードに写真をカテゴライズしてみた時に共通項として見えてきたのも、運搬に果たした役割であった。写真2-6(1)、2-7(2)では牧草を運んでいたが、運搬するのは収穫物に限らない。写真2-8(1)は土質改良のための浜砂を運ぶところである。そして、写真2-9(1)のように人もまた馬によって移動していた。

こうしてみると、経済的に重要で次第に数を増やしていった乳牛と異なる形で、馬には存在感があったことを理解できる。写真2-10(1)の馬の名前は「モベツ」という。勢いよく走る馬としてYさんの記憶に残るモベツのように、アルバム中の馬は、固有名詞をともなあって振り返られる存在でもあった。

### アルバムの中の家畜飼養

「家畜の飼養」というキーワードからU家アルバムをみてきた。そこでは、U家の生活に欠かすことの出来ない存在として、牛と馬という性格の異なる家畜の姿が浮かび上がってきた。それは、点景として写りこんだ写真にのみ確認できるものではない。写真3-(1)は牧草反転の様子を写している。当たり前のことになるが、この光景は、酪農がU家の生活の一部となって初



写真3-(1) 牧草をフォークでもって反転する。

めて写真に収まることが可能となる。そして、写真中の牧草の運搬は馬車によってなされたであろう。写真3はそこに写っていない乳牛と馬の上に成り立っているのである。

## (2) 麦稈の利用

入植以来重要な生業の一つであったことを、聞き書きを通して確認できる畑作であるが、農作業時の写真はほとんどアルバム中にみあたらない。栽培作物が写りこんだ写真も数が限られている。換金作物である馬鈴薯、自家用の野菜である大根・トマト・ナス・キュウリ・キャベツ、そして飼料作物であるデントコーンの写りこんだ写真が、それぞれ1~3点存在する程度である。1枚の写真に数種の栽培作物が写っている場合もそこには含まれているため、写真自体の点数はさらに少なくなる。

そうしたなかよく目に付くのが麦である。もっとも、畑に育つ麦や、麦栽培にともなう農作業が写っているわけではなく、様々に利用されたムギカラ(麦稈)が、アルバム写真の背景に写りこんだものがほとんどである。

U家では、物置や馬小屋、鶏小屋(鶏舎)を囲ったり、屋根を葺くのに脱穀後の麦稈を用いていた。馬小屋は丸太を積んで作られていたが、屋根は小麦稈で葺かれていた。そして、外側を燕麦稈で囲い寒さよけとした。鶏小屋の屋根を葺くときも小麦稈が使用された。小麦稈は固くて滑りがよく、雪が落ちやすかったためである。一方、燕麦稈は丈が長いので囲うのに適していた。林の中の土手に風呂場を設けていた時には、その場を囲うためにも使われている。このような形で利用された麦稈がアルバム写真の点景となっていた【写真4-1(1)~4-5(1)】。

麦稈の利用はU家以外の家々にもみられた営みであ

る。紋別市内陸部では、小麦・大麦・裸麦・燕麦が栽培されていた<sup>(9)</sup>。このうち小麦と燕麦を中心に、(1) ネットラ（厩舎床敷）、(2) 霜用のシバレヨケ、(3) 収穫物の雨よけ用のかさ、(4) 風よけの囲い、(5) 屋根材、(6) 荒壁、(7) 俵の素材、(8) 氷橋、といった桿の利用を確認できる（土田 2005）。

上記のような形で実際に利用される前の麦稈もU家アルバムには写っている。写真4-6(1)～4-10(1)では、いずれも家屋の周囲に、麦を積んだニオを確認できる。麦稈は小屋作りに使われたため、家の近くまで運び積まれていたのである。そこには、生活素材として大切にされた麦稈の、日常生活のなかでの位置付けがのぞいている。

### (3) 戦後開拓農家にとっての土地

麦稈の写りこんだ光景に表れている、畑作への依拠の度合いが高かった入植当時の生活が、第1節でみたように、酪農へ集約化してきたのは、寒冷な気候や生産性の低い土壌へ対応するためであった。この開拓地の農業に不向きな性格と、U家は、粘土地の改良を通して向き合うことになる。

「粘土でかたまちゃってるんだもの。水はけも悪いし。ものを作るのには向かない土地よ。本当に」

Yさんがこう評価する粘土地の改良には、浜砂を用いる方法と暗渠土管を用いる方法の2つがあった。

浜砂とは海岸部の砂のことである。それを、冷害の年の救農政策としての冬仕事のなかで、馬によって運び、耕地へ加えたのであった。同じように救農政策による冬仕事として、4線の道に沿って明渠も掘られた。4線はU家の前住居が面していた道である。明渠を掘ったのは、山からの水の流れが滞らないようにするためであった。これらの作業は、冬仕事とはいっても、まだ雪の積もる前に行われていた。参加者はそれぞれお弁当を持参していたが、近隣の人が集まったの作業のため、家も近く、食事時には帰ることもできた。「あの頃は本当に部落の人がよく集まったよ」とYさんはいう。

暗渠作業もまた、水はけをよくすることを目的に行われていた。U家では、国費により暗渠土管を土中に埋めている。作業には、地元の人その他、紋別の南に隣接する湧別からも人夫が何人かやってきた。農家の人々が冬仕事のデメンでやってきていたのである<sup>(10)</sup>。人夫は、秋から2月間にわたって、U家に5人6人と泊まってい

く。彼らの食事には、米・麦を炊いた御飯とホッケを出した。一斗樽に塩漬けや糠漬けにされたホッケを焼いて出すのである。「くる日もくる日もホッケ。ほんとよ。ホッケがご馳走」だった。米は、U家の下流に位置する元紋別の農協支所で購入した。

このように人手をかけた手作業による暗渠作業は、写真5-1(1)の頃にみられたものである。時代が下ると写真5-2(3)～5-6(3)のように重機でもって作業が進められるようになった。

写真5-1(1)の場合は点景として暗渠土管が写っているのに対し、重機が使われるようになってからの写真は、暗渠作業を撮影対象としてシャッターが幾度も押されている。撮影者は不明で、誰が記録の意図を持っていたのかさだかではない。工事関係者が撮影した可能性も否定できない。しかし、撮影者が誰であるにせよ、暗渠作業の記録写真がアルバム中に収められ、そのなかでひとつのグループを形成している状況にかわりはない。そこに、生産基盤としての土地や暗渠作業に対するU家の関心の高さを窺える。

### (4) 生産領域の広がり

ここまで確認してきたのは、いずれもU家の入植地の内側での営みとなるが、時に生産活動の範囲は入植地の外側へひろがることもあった。

写真6-1(1)～6-6(1)は、汽水湖であるコムケ湖と、その周辺の湖沼で行われていたシジミ採りの様子をおさめたものである。湖はU家から10kmほど離れたところにあり、集落を貫流する藻別川河口の南側に位置する。

シジミ採りには、大抵お昼を食べてから午後に行っていたという。季節は夏で、コムケ湖の続きの湖で採っていた。出かけるときには近所で声を掛け合い、袋【写真6-1(1)】を準備した。Yさんの場合は年に3度も行けばたくさんだったというが、もっと多く行った人もいる。

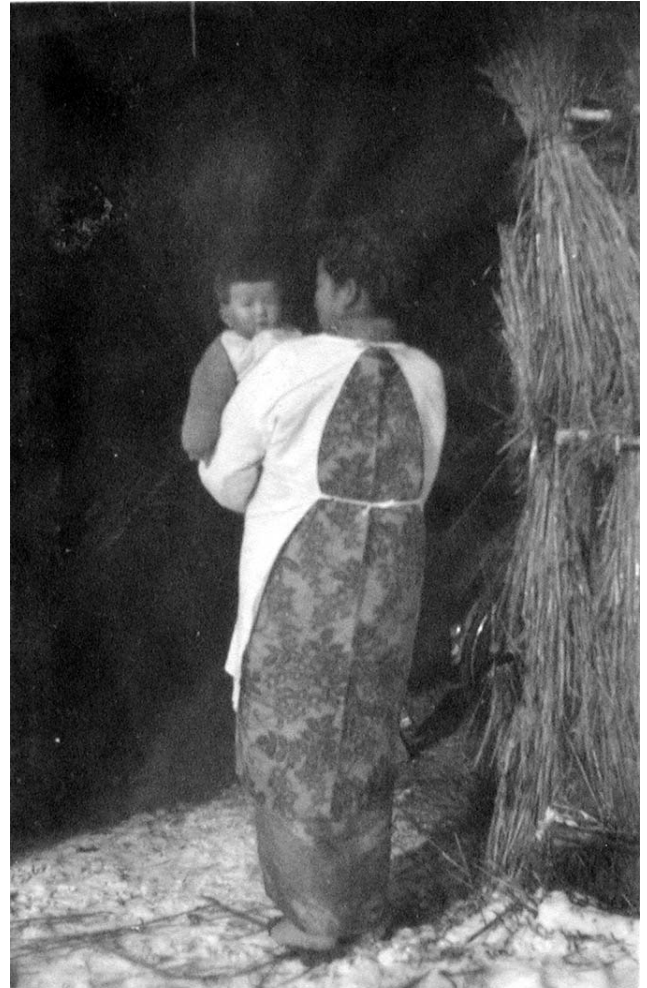
採集場の水かさは膝ほどであった。足下の泥の中を足で探り、シジミを見つけると手探りで拾う。一粒一粒拾うという感じで、子どもたちはしゃがみこんで採っていた。採ったシジミは、みそ汁にして食する。採ったその時に食べれば一番味が良かったが、冷蔵庫などで保存されることもあった。当時はいくらでも採ることができたが、今は禁漁となっている。

お弁当を持ち寄って共食し【写真6-2(1)・6-4(1)・6-5-

写真4 麦①



4-1-(1)



4-3-(1)



4-2-(1)



4-4-(1)



4-5-(1)

4-1-(1)～4-5-(1) 麦稈が背景に写りこんでいる。4-1-(1) で子どもが座っている竹の椅子は、静岡の実家から子どものために送られてきたものである。4-3-(1) は馬小屋の入口である。着物を着ているので、お正月の時の写真と思われる。写っているのはメイセンの着物で、静岡から持ってきたものだった。4-4-(1) は馬轎の上に乗っているところ。背後に見えるのが麦稈を用いた馬小屋である。4-5-(1) では手前に麦を積んだニオも確認できる。



写真4 麦②



4-6-(1) 共同で行なった麦の脱穀作業時の一枚。当時、発動機を所有していた家は限られていた。発動機を有している家の主人が、順番に家々を廻り、近隣の家同士で共同で脱穀作業を行った。発動機を使ったのは、燕麦や麦の脱穀時くらいのもので、豆（大豆・エンドウ）や蕎麦にはカラサオを使っていた。



4-7-(1)



4-8-(1)



4-9-(1)



4-10-(1)

4-7-(1)～4-10-(1)  
いずれも家屋の側に麦が積まれている。4-8-(1)は、確認しにくい  
が、玄関右脇に積まれている。

## 写真5 暗渠作業



5-1-(1)



5-2-(3)



5-3-(3)



5-4-(3)



5-5-(3)



5-6-(3)

5-1-(1) ~ 5-6-(3) 5-1-(1) は、写真中の人足袋を履いているので、農作業の期間と考えられる。右側の人足が腰掛けているのが、暗渠の土管である。この頃は手作業で暗渠を埋めるところまで掘っていた。のちの暗渠排水工事【5-2-(3)~5-6-(3)】では、機械化が進んでいる。

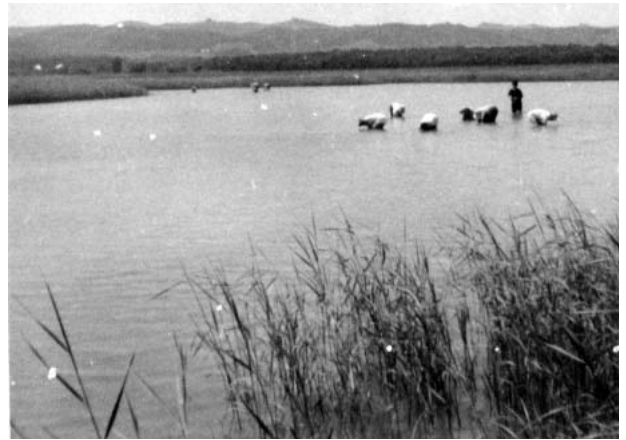
写真6 シジミ採り



6-1-(1)



6-2-(1)



6-3-(1)



6-4-(1)



6-5-(1)



6-6-(1)

6-1-(1)～6-6-(1) 近隣の人と出かけたシジミ採り。6-5-(1)の真ん中に写っている人が、皆を率先して誘っていた。そのため、Yさんは「シジミ採りの親分」と彼を表現する。写真6-1-(1)ではシジミの入ったビニール袋を手に持っている。6-4-(1)～6-5-(1)の3枚は、このようにパノラマ写真のように張り継がれていた。

(1)、成果を手に記念写真をとるその光景からは【写真6-1-(1)】、シジミ採りの生業としての重みや切実さは感じられない。むしろ、娯楽性を印象づけられる。とはいえ、Yさん自身「遊び半分」と語るシジミ採りが、自家食用という形で家々の生活に関わってきた点を見落とすことはできない<sup>(11)</sup>。換金作物栽培や酪農と比べると経済的価値はそれほど高くないのであるが、そうし

た農業経営の枠組とは別の次元で、開拓農家の生活を補完し、支えてきた営みのひとつになるからである。

(5) アルバムからみたU家の生産活動

ここまで、「生産活動」というテーマのもと、点景や被写体としてアルバム中に度々登場する事象をカテゴリーライズし、それがU家の生活に占めた位置を探ってきた

た。そこからは、農業経営という視点からは漏れてしまふであろう営みも組み合わせる形で生計を維持してきた、U家の暮らしの立て方の一面を理解できる。注意しておきたいのは、そのひとつひとつの生産活動が、個別に完結したものではなかったことである。例えば、これまでに「家畜の飼養」「麦」「暗渠作業」「シジミ採り」についてとりあげてきた。こうして並べてみるとまとまりのない事象の集合に見えるけれども、それらは互いに無関係のまま個別に成立していたのではなかった。

そのことが馬と生産活動の関係によく現れている。U家の馬には、日常生活の様々な場面で、畜力としての能力が求められていた。「シジミ採り」などの入植地の外側で営まれた生産活動においても、そのための人の移動や物の運搬は、馬に頼っていたのである。<sup>(12)</sup>

その馬の存在を「麦」が支えていた。麦稈が多様に利用された麦は、人や馬の食生活のなかで基本となる栽培作物であった。大麦や裸麦は炊いて、小麦は粉化後うどんなどにして食されている。そして燕麦は、重労働の時は必ず馬に与えられた、重要な飼料作物であった。

さらに、麦を栽培するにしても、牧草地にするにしても、入植地を生産領域として十分機能させるために土地改良は欠かせなかった。U家の場合は浜砂入れや暗渠作業により粘土地の水はけをよくし、堆肥をすき込むことで畑を作ってきた。

こうした生産活動の相互関係が、小稿が取りあげてこなかった営みも含めて、ひとつの体系を持ってU家の生活のなかに展開していたのである。

## おわりに

小稿では、最初に図像資料としての家族アルバムの読み方を確認し、次に、「U家アルバム」の写真群それ自体が示す生活構造について、生産活動に焦点をあてて検討した。その結果、多様な生産活動を営む複合性と、そこにおける生業要素相互の関係に含まれている体系性とを看取することができた。とはいえ、アルバ

ムの写真群に現れたのはあくまで一部にすぎない。ありのままの生産活動全てがアルバムに収められているのではないからである。

例えば、カメラが携行されやすい営みとそうでない営みの違いが反映されるはずであるし、家族アルバムが個々の家にとってどのような意味を持っていたのか、アルバムの性格によって、日常生活を写真という形で切り取る行為は規定されてくる。

こうしたいくつかの条件が、家族アルバムから生産活動の複合性と体系性の、全体像を把握する作業を難しくしている。しかし一方では、アルバムに収まった場と収まらなかった場の関係に、U家の生活の姿勢や戦略を読みとれそうである。Yさんは次のように語る。

「山菜もね、この裏ワラビガハラだったの。(でも山菜は個人の好みで) 食べるのが決まってくるのよね。踏とウドは本当に好きだ。ウドは水が一杯出るけど、冷凍したものを水を捨てて、酢みそ和えにしてもおいしい。ワラビってのは私はあまり好きではない」

春は山菜の季節であるが、忙しくて採りにいけなかったともいう。新しく入植したため、まだひとつひとつの作業に慣れておらず、農作業に時間がかかったのだった。また、秋にサケを捕らないのはU家ともう一軒だけと言われたこともあったそうである。

こうした狩猟・漁労・採集活動に対するU家の姿勢が、アルバム中におけるそれらの営みに関する写真の少なさに、ある面で反映されているだろう。

前述のように、図像資料としての「U家アルバム」から、この家の生業構造を全て捉えきけることは難しい。撮影時の演出、編集や書き込みといった行為も含めて、過去の姿そのものではなく「所有者にとってのひとつの物語」(有馬 2002: 20) である家族アルバムの基本的な性格を踏まえると、生業構造の一面を垣間見るところまでがひとつの射程、限界線になりそうである。しかしそこにおける制限のかかり方に、同時に、ある家の生活の姿勢や戦略を把握できる可能性も潜んでいるといえよう。

(つちだ・たく)

## 【注】

- (1) Yさんの語る開拓講習所の正式な名称などは不明である。『戦後開拓史（完結編）』によれば、昭和21年に農林省及び都道府県に開拓増産本部が設けられ、中央本部には中央開拓訓練所（静岡県西富士）が敷設されたという（戦後開拓史編さん委員会 1977：6）。開拓増産本部には、帰農を目的とした開拓増産隊と、帰農を目的とせず、開拓地を渡り歩いて開墾建設作業を機動的に実施して給与を得る開拓建設隊があった。筆者がU家へ通うようになったとき、すでにご主人は鬼籍に入られており、詳細を伺うことはできなかったのだが、地理的な位置関係から、Yさんの語る「開拓講習所」と中央開拓訓練所の関係が推測される。当時開拓講習所には、復員兵が大勢きていた。Yさんのご主人は台湾からの引き上げだった。
- (2) 家族アルバムや家族写真を活用する際の留意点は、佐藤が家族社会学との立場から細かく整理している（佐藤 1989）。家族アルバムや家族写真の分析については、これまで、それらはたしてきた役割が注目されてきた（鶴見 1965；坪井 1986；角田 2002；高橋 2003など）。また石本敏也は、巡礼のアルバムの編集過程に注目し、そこに表れる「充実感」を手がかりに現代巡礼を考察している（石本 2005）。
- (3) 植民地の選定と区画割の基準は時代・地域によって一様ではない。これらの事業の経過に関しては、これまでに何度か編纂されてきた『北海道史』に詳しい（北海道庁 1937：123-166；北海道 1973：247-262など）。
- (4) こうした感覚は牛舎の建築にも反映される。1953年（昭和28）に牛舎を建てた男性（大正6年生まれ）は、その頃付近で一番大きい農家が牛を4頭飼っていたので、それを目安として牛を4頭入れられる牛舎を建てている。
- (5) 例えば、牛の数が増えれば当初の牛舎では飼養しきれない。そのため牛舎を接いだり、多頭飼育が可能な規模のものを新築したりする。その対応の仕方は、多頭化に踏み切った時期、規模、その後の飼育の方針といった、個々の家の姿勢の違いに基づき微妙に異なってくる。それが、牛舎の形状や畜舎景観にいくつかの型をもたらしている（土田 2006）。
- (6) 1950年度（昭和25）から開始された道有雌牛貸付事業は、「道が牝牛を市町村・農協に貸付け、市町村・農協が無牛農家に対し飼養管理を委託する形式をとり、借受者は五年以内に生まれた牝犢を返納すれば、無償で貸付牛の払下げをうけられるしくみ」（農政史研究会 1976：220）であった。道有貸付牛のみでは量的に限られるため、それを補うために多くの市町村・農協が独自に乳牛導入事業を実施している（農政史研究会 1976：220）。
- (7) 馬鈴薯や大豆の出荷、馬の販売による収入については、U家に保存されている昭和35年の農協の「組合金融通帳」に記載がある。一方、農協を通さないため通帳に記載されない収入もある。ここで取り上げたうち、鶏卵の販売や冬期の林業がそれにあたる。
- (8) 秋起こしは、秋に行う耕起作業のことである。秋興しを行わないと、冬の間に土が固くなってしまう。
- (9) 裸麦は大麦の一種であるが、調査地では大麦という呼称は裸麦以外の大麦を指すことが一般的であるため、小稿でも大麦と裸麦は区別して表記した。
- (10) デメンとは、賃金労働のことである。その働き手を同じ言葉で表現する場合もある。
- (11) これらの生産活動について民俗学では、マイナーサブシステムや生業複合という用語とともに、その実態が明らかにされてきた。そこで報告されてきた個別事例の場合は、明治以前からの歴史を有する北海道外の地域であることが多かった。そうした地域における狩猟・漁労・採集といった活動と、明治以降に拓かれた開拓地における同様の営みでは、生活に占めた比重が異なっている。開拓地における狩猟・漁労・採集の実態に関しては、聞き書きなどによるアプローチが可能である。ただ、ここではアルバム写真から開拓地の生活構造を窺うことに焦点をあてているため、詳しくは稿をあらためて検討したい。
- (12) 今回取り上げたアルバムよりも、後年のアルバムにはU家のトラックが写っている。このトラックの登場により、最後まで残っていた運搬に果たした馬の役割も終わりを迎えている。

## 【参考文献】

青木俊也

2000 「企画展「戦後松戸の生活革新」における展示の視点」『企画展 戦後松戸の生活革新～新しい暮らし方へのあこがれ～』109-115、松戸市立博物館

有馬 学

2002 「序 家族の数だけ歴史がある一家族アルバムをどう読むか」『日向写真帖 家族の数だけ歴史がある』（日向市史別編）7-23、日向市

石本敏也

2005 「アルバムのなかの巡礼—編集し直される四国八十八箇所—」『日本民俗学』241、1-30、日本民俗学会板橋区史編さん調査会

1997 『板橋区史』（資料編5民俗）板橋区

角田隆一

2002 「家族写真の社会学的一考察—「記憶」からみる写実実践とその社会的機能—」『現代社会理論研究』12、50-69、東京：人間の科学新社

香月洋一郎

2007 「風景としての情報」『手段としての写真—「澁澤写真」の追跡調査を中心に—』（神奈川大学21世紀COEプログラム調査研究資料4）1-34、神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議

佐藤友光子

1989 「家族写真と家族研究—写真資料の有用性と問題点についての考察—」『社会学年誌』30、63-77、早稲田大学社会学会

戦後開拓史編さん委員会

1977 『戦後開拓史（完結編）』全国開拓農業協同組合連合会

高橋千晶

2003 「『家族写真』の位相—家族の肖像と団欒図—」『美学芸術学』18、79-95、美学芸術学会

土田拓

2005 「北海道非稲作地域の暮らしと民俗—紋別市内陸部における麦の稈利用と脱穀をめぐる営み—」『北海道東北史研究』2、35-46、北海道東北史研究会・サッポロ堂書店

2006 「住みつづける意志—紋別市内陸部における畜舎景観の成りたち—」『年報人類文化研究のための非文字資料の体系化』3、271-284、神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議

坪井洋文

1986 「故郷の精神誌」『現代と民俗—伝統の変容と再生—』（日本民俗文化大系12）267-308、東京：小学館

鶴見良行

1965 「家庭アルバムの原型」『思想の科学』34、43-50、東京：思想の科学社

農政史研究会

1976 『戦後北海道農政史』東京：農山漁村文化協会

北海道

1973 『新北海道史』（第4巻 通説3）北海道

北海道庁

1937 『新選北海道史』（第4巻 通説3）北海道庁